

京都大学全学共通少人数セミナー
平成19年度講義ノート

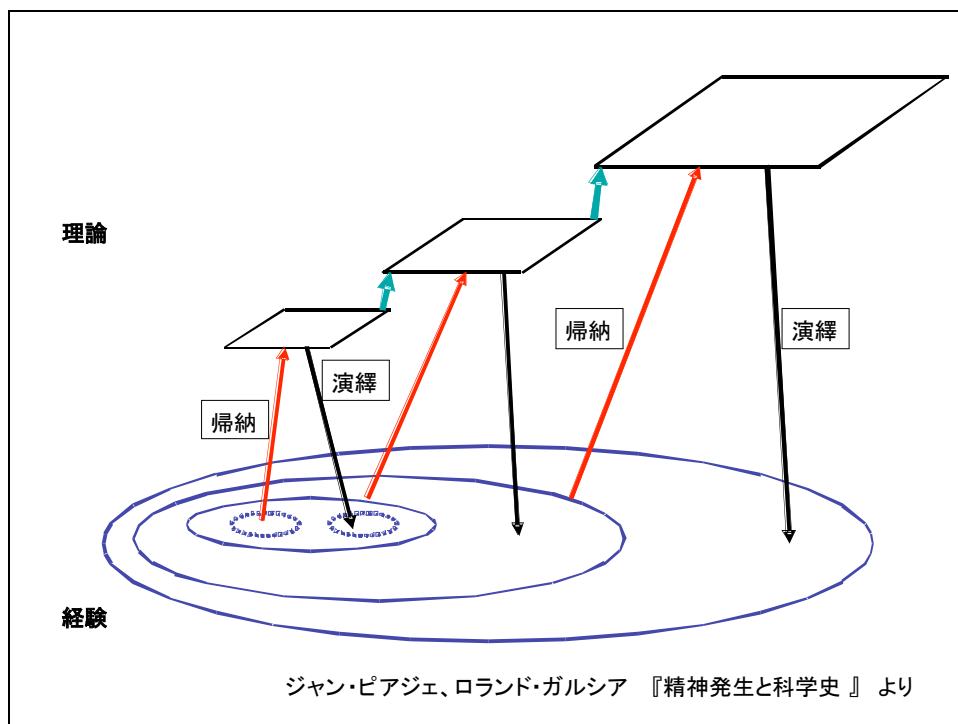
第7回 構成的認識の理論と実践
－発生的認識論・進化論的認識論・原型論の統合－

発達心理学者のピアジェは、子どもの発達過程に着目して、いわゆる「発生的認識論」を提唱した。それによると、子どもは、ある種の臨界期を越えると、不完全な対象から、完全な理論を構築することができるようになる、という結論に到達した。

動物行動学者のローレンツは、人間の「認識」という特殊な機能を解明するためには、人間の他の器官と同じように、系統発生（すなわち進化）に基づいた理解が欠かせないことを主張した。こうした主張は、のちにリードルらによって「進化論的認識論」として提唱されるようになった。

精神病理学者のユングは、神話の分析や精神疾患の治療を通して、人類には、人種や時代に左右されない共通な無意識構造、いわゆる集合的無意識が存在するという「原型論」を提唱した。この集合的無意識というのは、心の生得的な形式を規定しており、時代背景や断片的な知識に応じてその内容は規定されると考えた。

村瀬は、この3つの理論を統合した、「構成的認識論」を構想する。

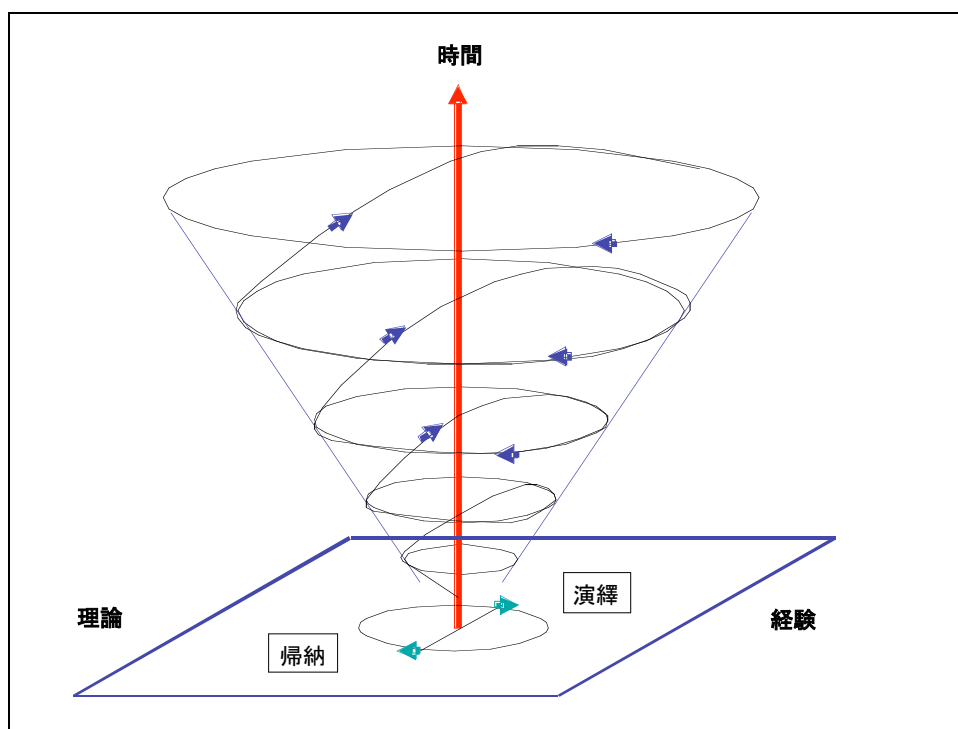


第3回に提示した、湯川秀樹のべん図は、上のピアジェ、ガルシアの理論構築図を参考にすると、理解しやすい。時間の発展（図では、左から右へと移行する）とともに、経験領域は拡大されていき、それに伴って理論も発展する。

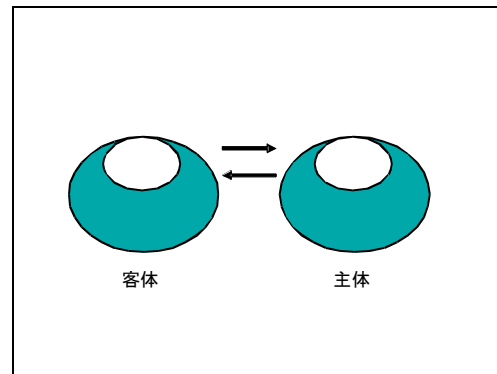
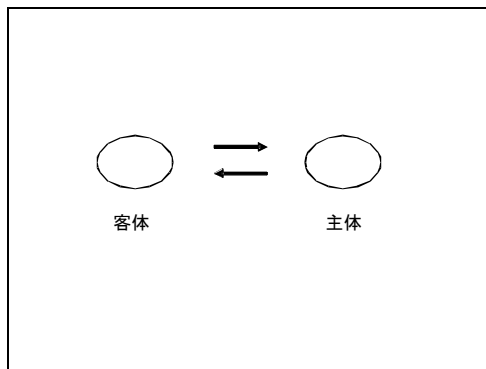
ピアジェによる「内」→「間」→「超」の発展規則

上記の発展図は、対象「内」分析 → 対象「間」比較 → 「超」対象へ向う発展の一般原理が見て取れる。ここで、「超」対象とは、メタ対象と同義である。この図を、90度左回りに回転すると、以下のようならせん構造図が得られる。

ここで、理論—経験 は、客体—主体、環境—生体などと置き換えることが可能である。その意味は、こうした循環がより原始的な状態から発展するとした進化論的認識論の骨子となっている。

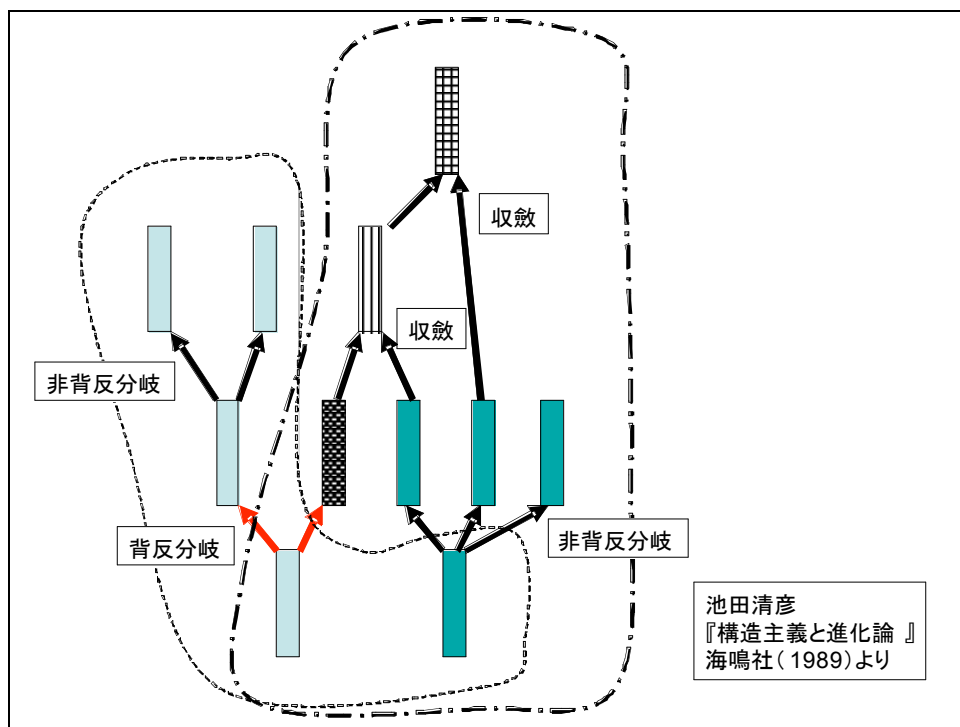


不完全な1次情報から、完全な理論が構成されるプロセスが、対象「内」分析 → 対象「間」比較 → 「超」対象へ向う発展過程である。このとき、与えられた対象「内」の情報を超えた、新しい情報の生成が必要となる。その新たな情報の起源を対象に求めるのではなく、主体の脳（心）に求めたのが、ユングであり、言語に関してはチョムスキーなのである。



重要なことは、客体にしろ、主体にしろ、階層構造が存在しているという点。新しい情報は、そうした階層性からもたらされる。(現代の汚染環境による認識不良は、集合的無意識による認識過程に匹敵する大事件である。)

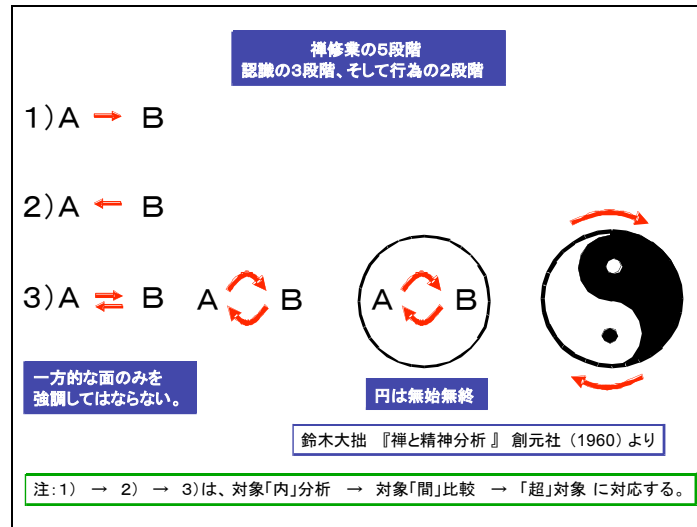
これに対して、チョムスキー以前の言語学に代表される構造主義は、主体をはなれて外的に存在する客体の実在性を前提とし、その対象に対する構造分析を進めていた。



参考文献

- 1) K.ローレンツ (1973) 『鏡の背面—人間的認識の自然史的考察』 (谷口 茂 訳) 思索社 1974年
- 2) C.G.ユング (1936) 『原型論』 (林 道義 訳) 紀伊国屋書店 1999年

参考資料



禅修業の五位

- 1) **正中偏**：一即多、多の中の一、つまり、一が多の中にあるから、多を多として語れる。(正と偏は易学の陰と陽のごとく両極)。
- 2) **偏中正**：多即一、一が多の中にあれば、多もまた一の中にある。多は一を一たらしめるもの。
- 3) **正中来**：‘正中’は、それ以前の位の‘正’とは異なる。抽象的な言葉が、肉体を帯びるようになる。抽象的な教理が、一人の人間へと転じありとあらゆる仕事に従事するようになる。「私」という矛盾的自己同一が、一体として出現する。一すなわち神は、多すなわち差別の世界の「外」に存在せず、両者は区別できずに一つであって、しかもそれぞれの個性を失っていない。ここで、動かずして動く真の「自己」が出現。それは、「外」に見える‘おのれ’ではなく、「内」に輝く‘いのち’。そこには、なんらの不安(すべてを知っていないという不安)もない。**転移の場**である。
- 4) **兼中至**：兼とは二つながら。上記に続いて、プロセスが見えてくる。この混沌の世界に入るのが「私」なのだ。この「私」は、有限であって無限、移ろい行くものであって永遠、限定されていて自在、相対であって絶対。禅者は自己の所証を実地の現実のまっただなかにその力を最高度に発揮する。
- 5) **兼中到**：到は行為の完結。禅者は目的地に達する。しかし、目的地といっても、実は陰もない無目的の地である。禅者の**外面**については言うべきこともなく、また意味もない。**内面**の生活に没頭し去っている。

禅の教えとは、自己は自己の自覚を、他者を助けその人の自覚を促す。

正：絶対、無限、一、神、暗(未分化)、平等、理

偏：相対、有限、多、世界、明(分化)、差別、個物

弁証法

- 西洋型弁証法(ヘーゲル)
定位(テーゼ)、反定位(アンチテーゼ)、
統合(ジンテーゼ)による矛盾の解決。
- 東洋型弁証法(タオ、陰陽原理)
Aの中に \bar{A} であること(あるいは、近いうち
に \bar{A} となること)が含まれている。
矛盾を利用して事態を把握する。
- 自己・非自己循環理論(村瀬)
直線的西洋思考と円還的東洋思考を統合する。

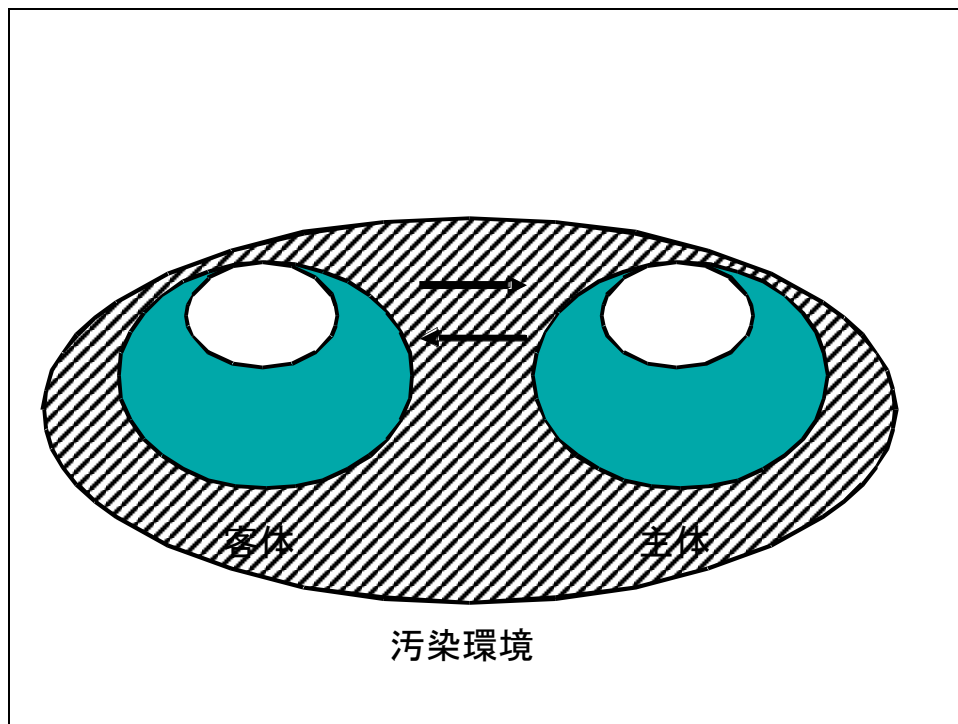


Endo-exocirculation



村瀬が考える現在の問題

従来までの精神修行の伝統は、環境世界の著しい汚染を想定していない。



要点

ヴァレラが指摘しているように、科学は究極的な根拠に対する人々の信頼を繰り返し裏切りつづけてきた。それでも、人々はそれを探している。

新しい根拠を見つけようと努力するのではなく、無根拠性を追及し、そこに踏み込む手段を見つけることが必要である。

事物の1つの状態について理解し認識するには、その逆の状態を必要とする。
ニスベット

構成原理： $A \rightarrow B$ ならば $B \rightarrow A$
これは、局所的にも全体的にも正しく、二者択一を超える (cf. 内→間→超)
ヴァレラは、オープンなではなく、クローズなを強調

それは、プロセスの結果がプロセスそのものとなるシステム
従って、対立としてみなされるとは、同じプロセスの別の側面

注意：一方から他方が記述できるという客観科学の前提が問題。生きているシステムにとって、相互作用の意味は、外から規定されるのではなく、システム自体の組織化と歴史から生じる。対立する2つからの生成を考える。

数学者の岡潔が指摘するように、「わかる」ためには「わからない」という状態がしばらくつづくことが、必要である。

「全くわからない」という状態が続いたこと、そのあとに眠ってばかりいるような一種の放心状態があったこと、これが発見にとって大切だったにちがいない。

岡 潔 『情緒の教育』(燈影舎、2001年)